

「分析哲学台湾派遣参加報告書」

京都大学文学部2年 金山仁美

2019年3月17日から25日にかけておこなわれた分析哲学台湾派遣に参加した。二日目から七日目までの六日間で任意の学会に毎日参加し、また台湾の学生と交流を深めた。多くが修士や博士、ポスドクの人々で構成されるなかで私は一人二回生（次の四月から出口教授の研究室への配属が決定している）であったので、個人の発表はおこなわなかったが、台湾大学での院生ワークショップにてほかの登壇者へのコメンテーターを務めた。

海外の学会参加はこれが初めてであったため、どれもがとても新鮮で興味深いものであった。とくに感じたことは日本の学会に比べて、議論が活発であり、有機的な質問が多いということだ。参加者の国籍も様々であれば、ある一つのテーマに沿って集まった人々でも専門分野がそれぞれに異なり、多角的な意見が見られた。一方で日本からの発表者に関しては、語学力のギャップが目立っているように感じた。話につまってしまうたりうまく質問者の意図をつかめなかったりすると、どうしても場の雰囲気を壊してしまい、聴講者のなかにも興味が失せている人々がいたように思う。これは参加者のなかで最年少であった自分にもっともあてはまる（これからの改善の余地がある）点であるので、これからの海外経験のなかで英語でのコミュニケーション能力をしっかりと養っていこうと決意するきっかけにもなった。

また今回の学会のおもなテーマは中国哲学と日本哲学との交流、現象学といった分野に絞られていた。これらは私が今後専門的に扱おうと考えている分野からは遠いものなので、事前知識に乏しく、議論の把握に苦労した反面とても興味深く聴講した。印象に残ったのはその多くがヒューマニズムや倫理を問題としている点で、自己のモデル一つとっても、それが倫理的によいものであるか、という批判点はこれまで自分が強く意識したことのないものだった。

海外経験を増やしたいと言っていた私を拾い、今回の派遣に誘ってくださった先輩のおかげで、有意義な時間を過ごすことができた。すくなくとも修士までは進みたいという意味は派遣の前後で変わらなかったが、これからどのように学び、またその学びを共有していくのかということについての具体的なイメージやモチベーションを周りの人から与えてもらったように思う。私の研究室ではこういった国際交流や派遣を頻繁におこなっているので、これからも積極的に参加して、さらに多様な人々や学びに触れていきたい。